

## 4. 各学校種調査結果の比較分析

### (1) 第一次調査結果に基づく再分析

本報告書ではこれまで、今後のキャリア教育の更なる推進・充実のために特に重要な側面に改めて注目しながら、学校種ごとの調査結果に対する新たな分析を試みてきた。具体的には、第一次報告書によって得られた結果に対する調査票横断型の再整理とクロス集計による分析を中心に据えつつ、とりわけ新学習指導要領において強く期待される学習意欲の向上をめぐる多変量解析を用いて、それぞれの学校種におけるキャリア教育・進路指導の現状と課題を明らかにしてきた。

ここからは、学校種を縦断するかたちで第一次報告書の結果を再整理し、学校種を超えたキャリア教育の推進・充実の課題と今後の方向性について考察する。

まず、学校種を縦断した比較を行う上で設定した五つのテーマと、その設定理由を示す。

#### テーマ1 児童生徒が職業や仕事を選ぶ基準

今回実施した児童生徒調査において、学校種を超えて極めて高い近似性が示されたのが「将来の職業を選ぶ基準」であった。しかも、7年前に実施した前回調査との比較を通して、興味深い変容も明らかになった。ここでは、児童生徒の意識の共通性と近年の変容を踏まえた指導実践のあり方について考察する。

#### テーマ2 学校種間の連携

#### テーマ3 地域社会等との連携

#### テーマ4 教育活動全体を通じたキャリア教育の実践

#### テーマ5 教員研修

テーマ2～5は、平成23年1月31日の中央教育審議会答申「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について」、及び、平成25年6月14日に閣議決定された第2期教育振興基本計画が求めるキャリア教育の充実のための方策に即して設定した。まず、発達の段階に応じた学校種間の連携(テーマ2)と、学校と地域社会等との連携(テーマ3)は、上記答申と教育振興基本計画の双方が、キャリア教育の推進・充実にとっての基盤として位置付けているものである。また、教育活動全体を通じたキャリア教育の実践(テーマ4)は、平成23年の答申が強く求めるのみにとどまらず、昭和40年代から今日に至るまで進路指導の方法原理の一つともなっている。そして、教員研修(テーマ5)については、答申が「キャリア教育の充実方策」の一つとして挙げており、また、キャリア教育の成否は教員の資質能力に負うところが極めて大きいことから、重要な分析テーマとして位置付けた。

## テーマ 1 児童生徒が職業や仕事を選ぶ基準

職業選択の基準は、小学校、中学校、高等学校を通してほぼ一貫  
「自分の興味や好み」を重視する傾向が一層顕著に  
子供たちの意識の変容を適切に捉えた実践の充実を図りましょう

- 児童生徒の職業選択基準は、学校種を問わず「自分の興味や好みに合っていること」、「自分の能力や適性がいかにせること」が上位に挙がっている。
- 前回調査と比較すると「自分の興味や好み」を重視する傾向が強まっている。
- 自らの「能力や適性」への理解を深める指導の充実など、児童生徒の意識と社会的現実の双方を視野に収めた指導の充実が求められる。

### (1) 児童生徒の職業選択基準

将来の職業を選ぶ基準について、小学校・中学校・高等学校の各段階で調査した結果、学校段階にかかわらずほぼ同じ傾向が見られた(表1)。上位及び下位項目が共通していることに加え、特に中学校、高等学校では順位も一致している

\* 1 \* 2 \* 3。

ただし、全学校種で上位1位の「自分の興味や好みにあっている職業」は、数値をみると小学校と中学校並びに高等学校とでは違いがある。小学校は約8割もの児童が選択しているが、中学校では約7割、高校では約6割と、徐々にその割合が減少している。小学校段階では「興味や好み」だけで職業を選ぶが、中学校段階からは「能力や適性」についても、同じくらいの比重で選択基準に取り入れるようになってきている。社会という現実にならざるにつれ、自己の「興味や好み」と「能力や適性」の現実との差異を分析するようになり、すり合わせがなされている結果と考えられる。

【表1】児童生徒の職業選択基準(上位4項目)

単位 (%)	小学校	中学校	高等学校
自分の興味や好みにあっていること(職業)	78.7 (1位)	69.3 (1位)	62.6 (1位)
自分の能力や適性がいかにせること(職業)	54.3 (4位)	66.9 (2位)	61.5 (2位)
失業のおそれがないこと(職業)	56.7 (2位)	48.9 (3位)	47.3 (3位)
社会や人のために役立ち、貢献できること(職業)	53.3 (5位)	43.6 (4位)	45.4 (4位)

※ 「とても選びたい」(小学校)、「とても重視したい」(中学校、高等学校)と回答した割合

※ 小学校の3位「みんなと協力して仕事ができる職業」は中・高の選択肢にないため除外した

【表 2】児童生徒の職業選択基準（下位 2 項目）

単位 (%)	小学校	中学校	高等学校
社会的な地位や名声が得られること（職業）	20.4（1位）	13.7（1位）	11.6（1位）
自分の自由になる時間が多く得られること（職業）	20.8（2位）	18.7（2位）	17.2（2位）

※ 「とても選びたい」（小学校）、「とても重視したい」（中学校、高等学校）と回答した割合

【表 3】前回調査における児童生徒の職業選択基準

単位 (%)	中学校	高等学校	中学校 (今回)	高等学校 (今回)
自分の能力や適性がいかせること	61.8（1位）	64.3（1位）	2位	2位
自分の興味や好みにあっていること	51.4（2位）	47.7（2位）	1位	1位
高い収入が得られること	26.4（3位）	23.4（3位）	—	—
社会や人のために役立ち、貢献できること	19.2（4位）	20.6（4位）	4位	4位
失業のおそれがないこと	14.9（5位）	16.7（5位）	3位	3位

※ 該当するものについて二つまで回答

一方、児童生徒が職業選択の基準として重視しない項目は、全学校種ともに「社会的な地位や名声が得られること」と「自分の自由になる時間が多く得られること」であった（表 2）。

## （2）7年前の前回調査結果と比較して

中学校と高等学校を対象に実施された前回調査とは回答方法が異なるため、数値の単純比較はできないが、上位の結果は次のとおりである（表 3）。まず注目すべきは、今回調査では 1 位と 2 位が入れ替わっている事である。前回は「能力・適性」の方が「興味や好み」よりも職業選択に重要と考えられていた。また、3 位の「高い収入が得られること」は、今回調査では下位に近い順位である。4 位と 5 位も入れ替わっている。前回は「社会や人のために役立ち、貢献できること」が「失業のおそれがないこと」より重視されていた。社会貢献より失業リスクの回避が重視されるようになったことは社会情勢の変化、とりわけ不安定な雇用状況によるものと推察される。以下、「自分の興味や好み」を重視する児童生徒が最も多く、「自分の能力や適性をいかす」ことを重視する傾向が相対的に弱まった点をめぐって、考察を続けたい。

## （3）キャリア教育の実践における児童生徒の適性・興味の位置付け

ここで、学校調査において「児童生徒理解のための個人資料として利用するために収集した資料」で「適性・興味などに関する検査・調査」を挙げた回答を整理してみよう（表 4）<sup>\*4\*5\*6</sup>。

【表 4】学校における適性・興味などに関する検査・調査の収集状況

単位 (%)	小学校	中学校			高等学校		
	今回調査	前回調査		今回調査	前回調査		今回調査
第1学年(低学年)	10.8	49.3	>	25.8	70.6	>	65.8
第2学年(中学年)	14.2	67.1	>	31.1	68.7	>	46.2
第3学年(高学年)	18.0	48.9	>	24.2	76.4	>	34.0
収集していない	80.2	—		59.3	—		21.5

【表 5】担任による適性・興味などに関する検査・調査及び進路希望調査の収集状況

単位 (%)	中学校		高等学校	
	適性、興味などに関する検査・調査の結果	進路希望調査	適性、興味などに関する検査・調査の結果	進路希望調査
よく利用している	12.3	77.4	16.8	72.3
ある程度利用している	43.1	20.7	48.0	25.4
あまり利用していない	32.3	1.3	29.2	2.0
収集していない	12.4	0.6	6.0	0.3

また、担任調査で「生徒理解のための個人資料」として「適性、興味などに関する検査・調査の結果」及び「進路希望調査」の利用状況は次のとおりであった(表5)\*7\*8。とりわけ「進路希望調査」の利用率が、中学校・高等学校ともに、挙げられた選択肢のうち最も高かった。なお、今回調査と前回調査とは、本設問に対する回答の方法が大きく異なるため、両者の数値を直接比較することはできない。

これらの結果から、中学校・高等学校においては、客観的なデータとして示される「適性・興味などに関する検査・調査」の利用率が低下し、担任の指導においても、生徒本人の進路希望を優先する傾向にあることがわかる。

#### (4) 日本と世界の職業選択の重視点の違い

第8回世界青年意識調査(平成21年3月内閣府政策統括官)では、日本を含む5か国の18歳から24歳までの青年の仕事に対する考え方を調査している(表6)。

日本の青年が仕事を選ぶ際に重視することとしては、「仕事内容」が69.3%で最も高く、次いで「収入」67.8%、「職場の雰囲気」58.6%、「労働時間」46.2%、「自分を生かすこと」40.8%となっている。「仕事内容」は、「興味や好み」と、「自分を生かすこと」は「能力・適性」と繋がっている。2位に「収入」が上がっているが、5か国比較でみると、日本以外の4か国では「収入」(アメリカ88.7%、韓国82.7%、イギリス81.4%、フランス76.8%)が最も高く、割合も日本より格段に高い。

また日本の青年は、他の国の青年に比べて、仕事を通して「自分を生かすこと」により強い関心がある一方、仕事における「能力を高める機会」への期待はやや弱い傾向がみうけられる。

【表 6】日本と世界における青年の職業選択の際の重視点

単位 (%)	日 本	韓 国	アメリカ	イギリス	フランス
仕事内容	69.3	47.1	57.3	41.8	48.4
収入	67.8	82.7	88.7	81.4	76.8
職場の雰囲気	58.6	41.6	54.8	47.6	45.7
労働時間	46.2	45.4	73.9	65.2	38.2
自分を生かすこと	40.8	27.6	35.1	28.0	27.9
将来性	33.9	49.8	53.2	49.7	44.1
能力を高める機会があること	30.1	28.0	48.7	43.8	32.5
事業や雇用の安定性	28.3	32.2	47.6	30.5	20.7

第 8 回世界青年意識調査

<http://www8.cao.go.jp/youth/kenkyu/worldyouth8/html/2-3-4.html>

### (5) 今後の方向性

日本の子供たちは、職業を通して「自分」を生かすことに強い関心がある。これは、前回調査と今回調査に共通する傾向であり、世界的に見ても、日本の青年の特質の一つと言えよう。しかし、前回調査からの意識の変容をより詳しく見ると、客観的な把握がある程度可能な「自分の能力や適性」よりも、主観的な判断による部分が相対的に大きい「自分の興味や好み」へと、関心の中心が移行していることが明らかとなった。

また、中学校・高等学校においては、「適性・興味などに関する検査・調査」の利用率が低下し、生徒本人の進路希望を優先する指導が多く見られることも示された。

さらに、本報告書Ⅱ－２－（１）、Ⅱ－３－（１）で指摘したとおり、中学校・高等学校においては、将来起こりうる人生上の諸リスクへの対応をめぐる指導が十分ではなく、社会的な現実を理解するための指導の弱さが懸念される。

近年、就業後のミスマッチを原因とする若年者の早期離職への関心が高まってきていることから、生徒自身の「興味や好み」を重視しつつも自己理解を助けるための客観的な資料の一つとして「適性、興味などに関する検査・調査の結果」なども適切に活用しつつ、社会的な現実の理解の促進にも十分配慮したキャリア教育の実践が望まれる。

職業選択に際し収入を重視する若者が他の国に比べて少ない日本においてこそ、多角的な視点から吟味された体系的なキャリア教育の充実が必要と言えよう。

#### 参考：第一次報告書における参照データ

- \*1 P93 小学校・児童調査 問 4
- \*2 P168 中学校・生徒調査 問 8
- \*3 P284 高等学校・生徒調査 問 10
- \*4 P76 小学校・学校調査 問 15
- \*5 P140 中学校・学校調査 問 16
- \*6 P247 高等学校・学校調査 問 18
- \*7 P152 中学校・担任調査 問 6
- \*8 P261 高等学校・担任調査 問 7

## テーマ2 学校種間の連携

上級学校への訪問や見学は、  
将来の生き方や進路を考える上で役に立つことを児童生徒は実感  
職場での体験を実施している学校は、「発表会」に受入先の園児や児童生徒、  
受入先事業所の関係者を招待しましょう。

- キャリア教育においては、同校種よりも異校種との連携が多い。
- 幼稚園や保育所（園）は中学校の職場体験活動や、高等学校のインターンシップの受入先となることが多い。
- 異なる学校種の児童生徒に発表会への参加を働きかけることにより、互いのキャリア教育の一層の充実が期待できる。
- さらに、上級学校への訪問や見学、上級学校調べは将来の生き方や進路を考える上で役に立っている。
- 児童生徒の生き方を考えさせる上で必要となる、キャリア教育における縦の連携は進んでいる。

### （1）キャリア教育の縦の連携に関する現状

まず、キャリア教育の学校種間の連携の現状はどうか。小学校に対する設問「キャリア教育の一環として、貴校が児童を対象として行う他の学校や諸機関との連携についておたずねします」\*1では「近隣の小学校」（56.2%：100%から「特に連携はしていない」の割合を引いた値、以下同様）、「近隣の中学校」（88.2%）が挙がっていた。中学校に対する同様の設問\*2では「近隣の小学校」（86.6%）、「近隣の中学校」（35.1%）、「高等学校などの上級学校」（69.3%）が挙がっていた（図1）。キャリア教育の推進に当たっては、同じ学校種よりも異なる学校種との連携が進んでいる。

続いて、キャリア教育における連携の手立てとして、多くの学校で実施している講話や出前授業の連携の現状はどうか。小学校に対する設問「講話や出前授業（出張授業）の依頼・協力」\*1では「近隣の幼稚園、保育所」（6.6%）、「近隣の中学校」（30.5%）が挙がっていた。また、中学校に対する同様の設問\*2では「近隣の小学校」（26.1%）、「高等学校などの上級学校」（35.2%）が挙がっていた。そして、高等学校に対する同様の設問\*3では「近隣の中学校」（28.7%）、「大学、専修学校などの上級学校」（69.8%）が挙がっているなど、キャリア教育における講話や出前授業では依頼校からみて前後の学校種、特に上級学校に依頼することが多い傾向が見られた。このことは、児童生徒の今後の進学先に対して、見通しをもたせたり、期待を高めたりする学校の意図が現れているものと推察される。

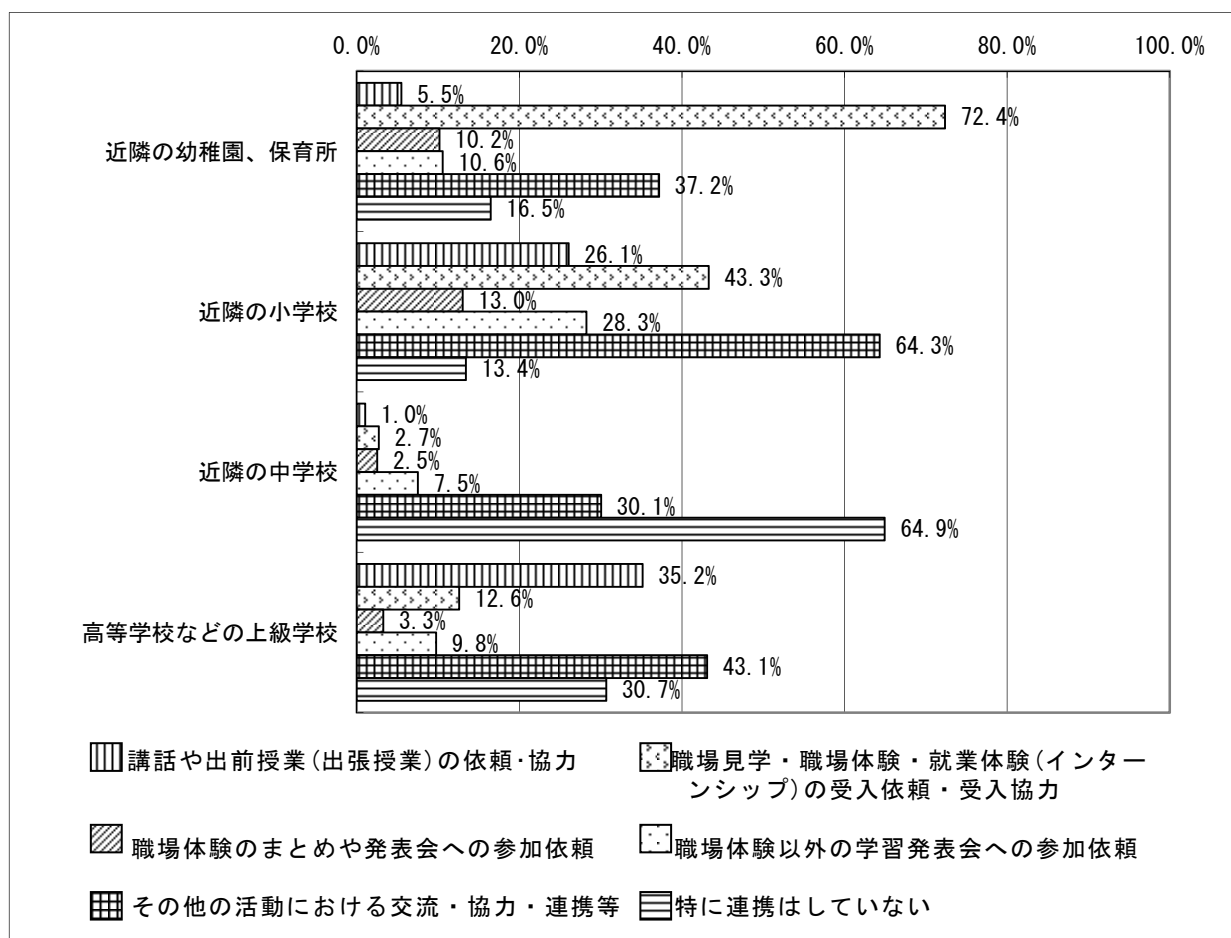
同じく、キャリア教育における連携の手立て、「職場体験活動やインターンシップ」

についてはどうか。小学校に対する設問「職場見学や職場体験の受入依頼・受入協力」\*<sup>1</sup>では「近隣の幼稚園、保育所」(11.3%)、中学校に対する同様の設問\*<sup>2</sup>では「近隣の幼稚園、保育所」(72.4%)、高等学校に対する同様の設問\*<sup>3</sup>では「近隣の幼稚園、保育所」(48.4%)が挙げられているなど、他の学校種と比べ、幼稚園、保育所との連携がさかんである。幼稚園や保育所が将来の職業として児童生徒に人気があることや、幼児もお兄さん、お姉さんとの活動を楽しめること、双方に利益のあることが、連携の推進要因となっているものと考えられる。

一方、職場体験活動・インターンシップ後に行われる「職場体験のまとめや発表会への参加依頼」\*<sup>2</sup>、「インターンシップの報告会や発表会への参加依頼」\*<sup>3</sup>についてはどうか。職場体験・インターンシップのまとめや報告会、発表会への参加を依頼する割合はかなり低い傾向が見られる。中学校に対する設問「職場体験のまとめや発表会への参加依頼」では、近隣の幼稚園、保育所に関して、職場体験の受入依頼は72.4%だったのに対してまとめや発表会への参加依頼は10.2%、近隣の小学校に関しては、職場体験の受入依頼は43.3%だったのに対し13.0%、高等学校などの上級学校に関しては、職場体験依頼は12.6%だったのに対し3.3%であった。高等学校では報告会や発表会への参加依頼を行う割合は更に低い。近隣の幼稚園、保育所には3.1%、近隣の小学校には1.2%、近隣の中学校には4.0%、近隣の高等学校には2.6%、大学・専修学校などの上級学校に2.6%と、中学校の値よりも低い割合となっている。

近隣の小学生を招いたり、出身小学校に出前で発表会を行ったりしている中学校では、生徒が発表に対して意欲を高めることができ、参加した小学生は、今後のキャリア教育の学習について見通しをもつことができたなどの成果が確認されている。また、職場体験活動の発表会に受入先事業所の関係者を招いている学校では、学校や生徒はお世話になった事業所に感謝の気持ちを伝えることができ、事業所は職場体験で生徒が何を学んだのか理解し、次年度の職場体験での働きかけがより良いものとなる。つまり、職場体験の発表会に招くことは、受入先との関係の向上に結びついている。このような効果は中学校に限らず他の学校種においても一定程度を望めると推測されるため、今後、職場体験活動やインターンシップの発表会開催の際には、積極的に他の学校種の児童生徒や受入先事業所の関係者を招くことを期待したい。

【図1】キャリア教育の一環として行う他の教育機関との連携(中学校・学校調査)

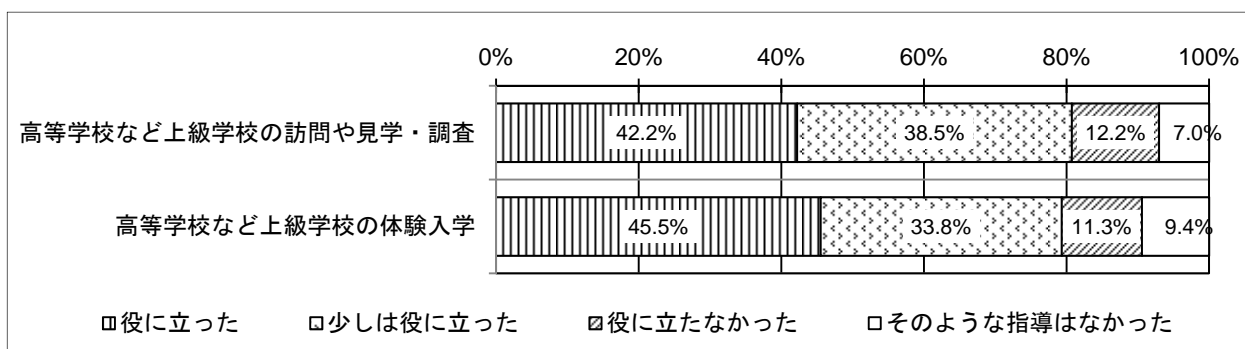


## (2) 連携したキャリア教育に対する生徒の学び

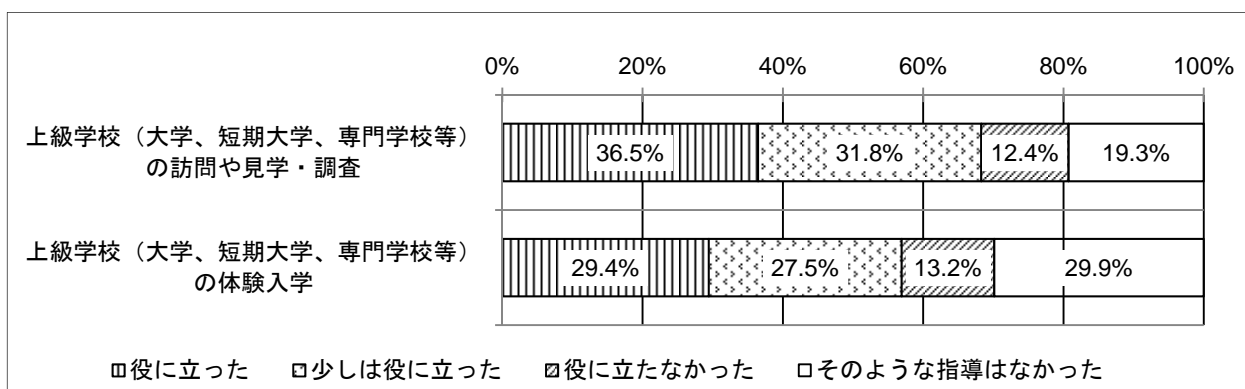
ところで、児童生徒の立場から、キャリア教育の指導の中で将来の生き方や進路を考える上で役に立ったと感じているものは何か。中学校の生徒に対する設問「中学校に入学してからこれまであなたが学校で経験した学習や受けた指導の中で、自分の将来の生き方や進路を考える上で、役に立ったものはどれですか」\*4では、「高等学校など上級学校の訪問や見学・調査」(42.2%)、「高等学校など上級学校の体験入学」(45.5%)であり(図2)、高等学校の生徒に対する同様の設問\*5では「上級学校(大学、短期大学、専門学校等)の訪問や見学・調査」(36.5%)、「上級学校(大学、短期大学、専門学校等)の体験入学」(29.4%)と、他項目と比較しても上級学校の訪問や体験入学が役に立ったと感じている生徒が多い(図3)。



【図2】 将来の生き方や進路を考える上で役に立った指導内容（中学校・生徒調査）



【図3】 将来の生き方や進路を考える上で役に立った指導内容（高等学校・生徒調査）



### （3）今後の方向性

キャリア教育における異なる学校種との連携については、これからの部分（職場体験の発表会等）もあるものの、各学校種において確実に進みつつある。連携の具体例として、取り組んでいる学校が多い「講話や出前授業」や「職場体験活動やインターンシップ」は、今後も縦の連携における中心となるものであり、「職場体験・インターンシップのまとめや発表会への参加依頼」はその教育効果の高さから、今後、各校において一層の推進が期待されるものである。

児童生徒にとって、縦の連携をいかしたキャリア教育の取組は、将来の生き方や進路を考えるために重要である。連携していく際には、双方に利益となる「Win-Win」の関係を築いていくことが大切である。学校種にかかわらず、今後もキャリア教育の一層の充実のために縦の連携を推進していくこと求められる。

#### 参考：第一次報告書における参照データ

- \*1 P67 小学校・学校調査 問9(1)
- \*2 P128 中学校・学校調査 問10(1)
- \*3 P234 高等学校・学校調査 問11(1)
- \*4 P173 中学校・生徒調査 問12
- \*5 P289 高等学校・生徒調査 問14

### テーマ3 地域社会等との連携

各学校種とも保護者との連携協力が今後重要となることを教員は実感  
保護者をキャリア教育の支援者として、ともに活動する場を作りましょう。

- ほとんどの小学校・中学校では、保護者との連携を積極的に図っている。
- 講演などについては保護者の協力はあまり進んでいない。
- 家庭、保護者、企業や事業所との連携は中学校で盛んに行われており、ハローワークとの連携は高等学校でよく行われている。
- 小学校における「職場見学」を広く捉えなおす必要がある。

#### (1) 学校と保護者の連携の状況について

キャリア教育は、児童生徒の自己理解や生き方などに関わる内容を扱うため、児童生徒にとって最も身近な大人である保護者の理解や協力を得ることは非常に重要である。キャリア教育に関する学校の活動に対する保護者の協力としては、例えば、保護者が職業についての基礎理解を深めるための講話の講師（ゲストティーチャー）をつとめることなどが考えられる。それでは、そのような取組は現在、各学校種においてどのように行われているのだろうか。

【表1】講話・講演の実施状況\*<sup>1</sup>

単位 (%)	小学校	中学校	高等学校
社会人による生き方や進路に関する講話・講演	48.6	68.2	79.8
保護者による職業についての講話	19.7	16.6	16.8

※ 100%から「実施していない」との回答の割合を引いて算出

【表2】家庭や保護者との連携\*<sup>2</sup>

単位 (%)	小学校	中学校	高等学校
家庭や保護者（PTAの委員会などを含む）	70.3	90.7	58.9

※ 100%から「実施していない」との回答の割合を引いて算出

【表3】キャリア教育を適切に行っていく上で今後重要になると思うこと\*<sup>3</sup>

単位 (%)	小学校	中学校	高等学校
キャリア教育の計画・実施に対する保護者の理解と協力	91.7	95.9	89.5

※ 「とても重要だと思う」と「ある程度重要だと思う」を合わせた肯定的な回答

【表4】児童生徒と保護者との将来の生き方や進路についての会話内容\*<sup>4</sup>

単位 (%)	小学校	中学校	高等学校
進学先や就職先などの進路情報	77.8	73.3	79.9
保護者自身の歩んできた人生やそこから得た教訓	48.8	51.8	47.5

「社会人による生き方や進路に関する講話・講演」は学校段階が進むにつれ行っている割合が高くなり、社会人との協力連携は学校段階が上がるほど進んでいる。一方、「保護者による職業についての講話」はどの学校種においても行っている割合が2割弱に留まっており、保護者との協力連携が進んでいない状況がうかがえる（表1）。

連携という視点でみると、小学校では約7割、中学校では約9割、高等学校でも約6割の学校が、キャリア教育の一環として家庭や保護者との連携を行っている（表2）。また、いずれの学校種においても9割前後の学級担任が、キャリア教育の計画・実施に際して、保護者の理解と協力を得ることが今後重要になると肯定的に考えている（表3）。そして、保護者も進路に関する情報や自身の人生から得た教訓を子供によく話している（表4）。

これらのことを考えると、学校が積極的に保護者に連携を呼びかけ、共通理解が進むよう図っていくことで、児童生徒にとって身近な社会人である保護者との協力が進み、学校と家庭との連携が更に深まると思われる。

## （2）学校と諸機関の連携の状況について

次に、学校と諸機関との連携の状況について示す。校外関係諸機関などとの連携計画を作成する学校は、学校段階が上がるにつれて増えている（表5）。また、キャリア教育の計画を立てる上で、小学校の40.4%、中学校の56.4%、高等学校の52.5%が、保護者や地域、外部団体との連携を図ることを重視している（表6）。中学校が一番高い割合で連携を図ることを重視しているのは、職場体験の影響が大きいと推察される。

学校外との連携の様子を学校種別にみると、職場体験の受入依頼の必要から「家庭や保護者」、「企業や事業所」との連携は中学校で盛んに行われており、その他の事業所等との連携は高等学校でよく行われている（表7）。ここでも、職場体験を実施することの影響は大きいことがうかがえる。

【表5】校外関係諸機関との連携計画の有無\*<sup>5</sup>

単位 (%)	小学校	中学校	高等学校
校外関係諸機関などとの連携計画	36.5	41.2	64.8

【表6】キャリア教育の計画を立てる上で重視したこと\*<sup>6</sup>

単位 (%)	小学校	中学校	高等学校
保護者や地域、外部団体との連携を図ること	40.4	56.4	52.5

【表7】キャリア教育の一環として行う諸機関との連携\*<sup>2</sup>

単位 (%)	小学校	中学校	高等学校
1 家庭や保護者 (PTAの委員会などを含む)	70.3	90.7	58.9
2 卒業生による組織 (同窓会等)	—	—	59.9
3 企業や事業所など	69.8	97.4	80.8
4 公共職業安定所 (ハローワーク)	—	21.3	51.9
5 ジョブカフェ	—	2.7	16.8
6 地域若者サポートステーション (サポステ)	—	1.0	9.3
7 特定非営利法人 (キャリア教育コーディネーター等)	17.4	12.1	25.8

※ 実施率として表記 (「特に連携はしていない」と回答した割合を100%から引いた数値)

—は未調査のもの

■は小学校・中学校・高等学校を比較して、それぞれの項目で割合が最も高いもの

【表8】体験学習等に関する受入の依頼状況\*<sup>2</sup>

単位 (%)	実施率
小学校 「職場見学の受入依頼」	52.7
中学校 「職場体験の受入依頼」	92.0
高等学校 「就業体験 (インターンシップ) の受入依頼」	62.7

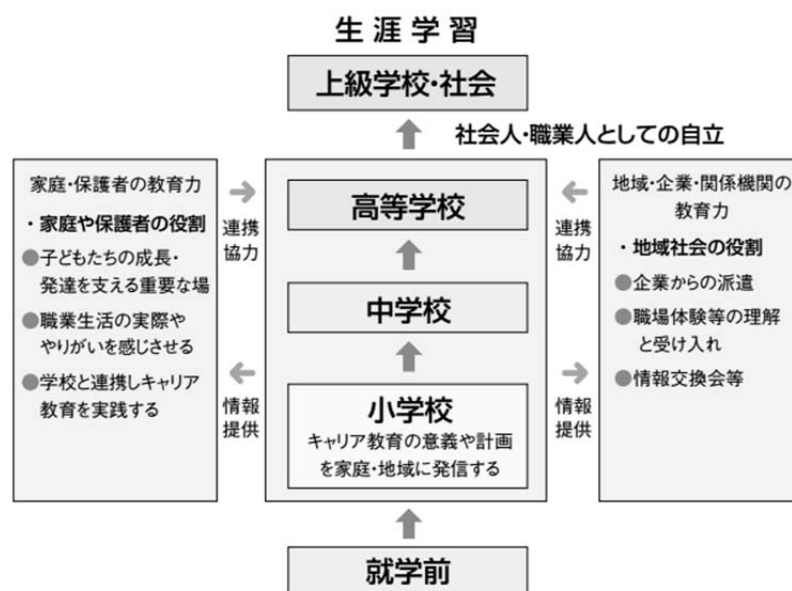
さらに、学校と企業や事務所などの諸機関との連携に関して、職場見学、職場体験、インターンシップ (就業体験) の受入依頼に焦点を絞る。小学校における職場見学の受入依頼は52.7%と、中学校の職場体験や高等学校のインターンシップ (就業体験) と比較して割合が低い (表8)。小学校では工場見学等を行っているところも多いが、恐らくそれらが職場見学でもあると捉えられておらず、低い割合になっていると推測される。また、中学校の職場体験の受入依頼に関しては、92.0%と他の学校種と比べて突出している。

以上のことから、中学校においては、職場体験が横の連携を進める上での基軸になっていることが改めて明確になった。小学校における職場見学、高等学校におけるインターンシップ (就業体験) が一層充実することにより、各学校種における横の連携が深まっていくことが期待される。今後の各学校種での取組に期待したい。

### (3) 今後の方向性

教育振興基本計画にあるように、社会の多様な主体が多様な形態で教育に関わることは、働くこと、社会とのつながり、社会に参画することの意義について身をもって子供たちに示し、将来に向けて視野を広げることにもなる。職場見学や職場体験、インターンシップ（就業体験）を足がかりにして、企業や事務所などと連携を強化することは、その他のキャリア教育に関わる様々な取組に、横の連携の視点を与えるものである。今後の学校・家庭・地域が一体となった取組が期待される。

小学校・中学校・高等学校の連携と家庭・地域との連携



出典：文部科学省（平成 23 年）「小学校キャリア教育の手引き」p55 より引用  
参

考：第一次報告書における参照データ

- \*1 P70 小学校・学校調査 問 11、P132 中学校・学校調査 問 12、P239 高等学校・学校調査 問 14
- \*2 P68 小学校・学校調査 問 9(2)、P130 中学校・学校調査 問 10(2)、P235 高等学校・学校調査 問 11(2)
- \*3 P87 小学校・学級担任調査 問 7、P154 中学校・学級担任調査 問 8、P264 高等学校・ホームルーム担任調査 問 9
- \*4 P102 小学校・保護者調査 問 3(2)、P180 中学校・保護者調査 問 3(2)、P296 高等学校・保護者調査 問 3(2)
- \*5 P59 小学校・学校調査 問 3(3)、P119 中学校・学校調査 問 3(3)、P224 高等学校・学校調査 問 4(3)
- \*6 P60 小学校・学校調査 問 3(4)、P120 中学校・学校調査 問 3(4)、P225 高等学校・学校調査 問 4(4)

## テーマ4 教育活動全体を通じたキャリア教育の実践

将来の生き方や進路を考える上で日々の様々な授業は役に立っている  
入学から卒業までを見通した系統的な取組や各教科の学習と結び付けた取組で  
キャリア教育の充実を図りましょう。

- キャリア教育の全体計画・年間指導計画の作成率は、中学校・高等学校に比べ小学校では低い。
- 年間指導計画に含まれる内容を比べてみると、小学校は全ての分野を通してキャリア教育が実施されているのに対し、中学校・高等学校は、各教科におけるキャリア教育の実施率が低い。
- 中学校・高等学校において、生徒は「様々な教科における日々の授業」が「自分の将来の生き方や進路を考える上で役に立った」と回答している。

### (1) 全体計画に記されている内容と年間指導計画に含まれる内容の比較

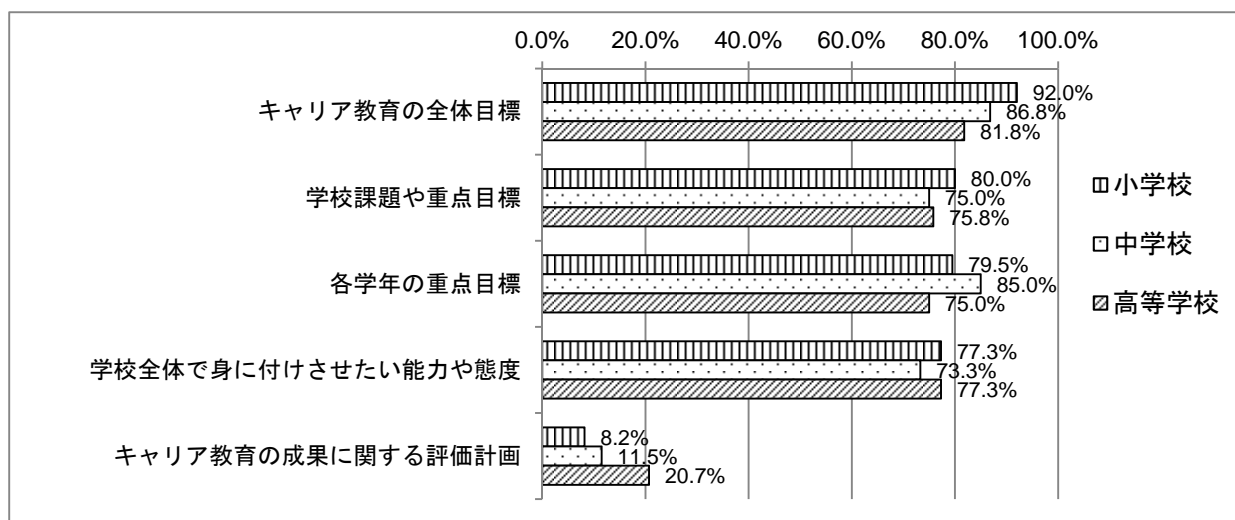
全体計画の作成率は、小学校では 63.4%、中学校 81.3%、高等学校 70.4%と中学校の作成率が高い。また、年間指導計画の作成率は、小学校 46.7%、中学校 76.7%、高等学校 80.4%と高等学校での作成率が高い\*<sup>1</sup>。

いずれの学校種でも全体計画に記されているのは「キャリア教育の全体目標」が最も多い(図1)。次いで小学校では「学校課題や重点目標」、「各学年の重点目標」、「学校全体で身に付けさせたい能力や態度」の順であるのに対し、中学校は「各学年の重点目標」、「学校課題や重点目標」の順であり、高等学校では「学校全体で身に付けさせたい能力や態度」、「学校課題や重点目標」、「各学年の重点目標」の順になっている。

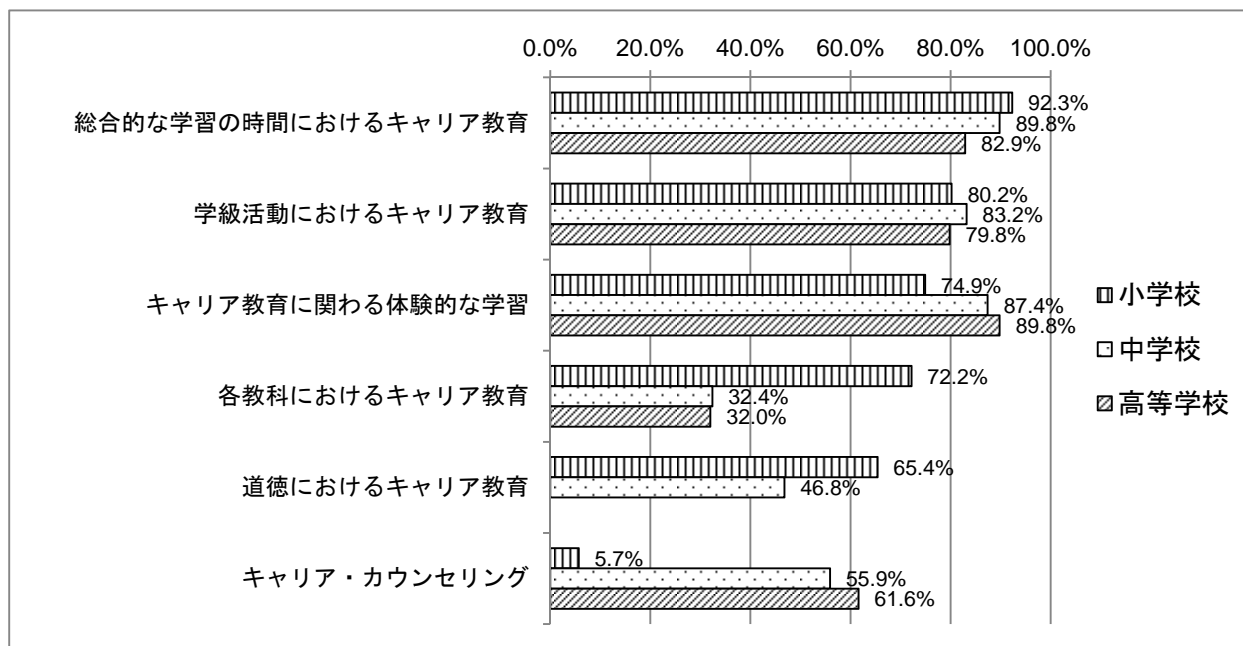
年間指導計画の内容は、小学校・中学校が「総合的な学習の時間におけるキャリア教育」が最も高いが、高等学校では「キャリア教育に関わる体験的な学習」が最も高い(図2)。しかし、「各教科におけるキャリア教育」は、小学校では 72.2%なのに対し、中学校は 32.4%、高等学校は 32.0%と低くなっている。中学校・高等学校では、各教科におけるキャリア教育の実施が不十分であることがうかがえる\*<sup>2</sup>。

また、「年間指導計画を立てる上で重視したこと」\*<sup>3</sup>に関して、小学校では「様々な教科や領域・行事等、教育課程全体を通じたキャリア教育が行われるようにすること」が 62.3%と最も高くなっている。しかし、同じ項目が中学校 53.1%で全 18 項目中 10 位、高等学校 49.9%で同じく 10 位であった。小学校では中学校・高等学校に比べキャリア教育の計画を立てる上で、教育課程全体を通じたキャリア教育が行われることを重視している。

【図1】全体計画の内容

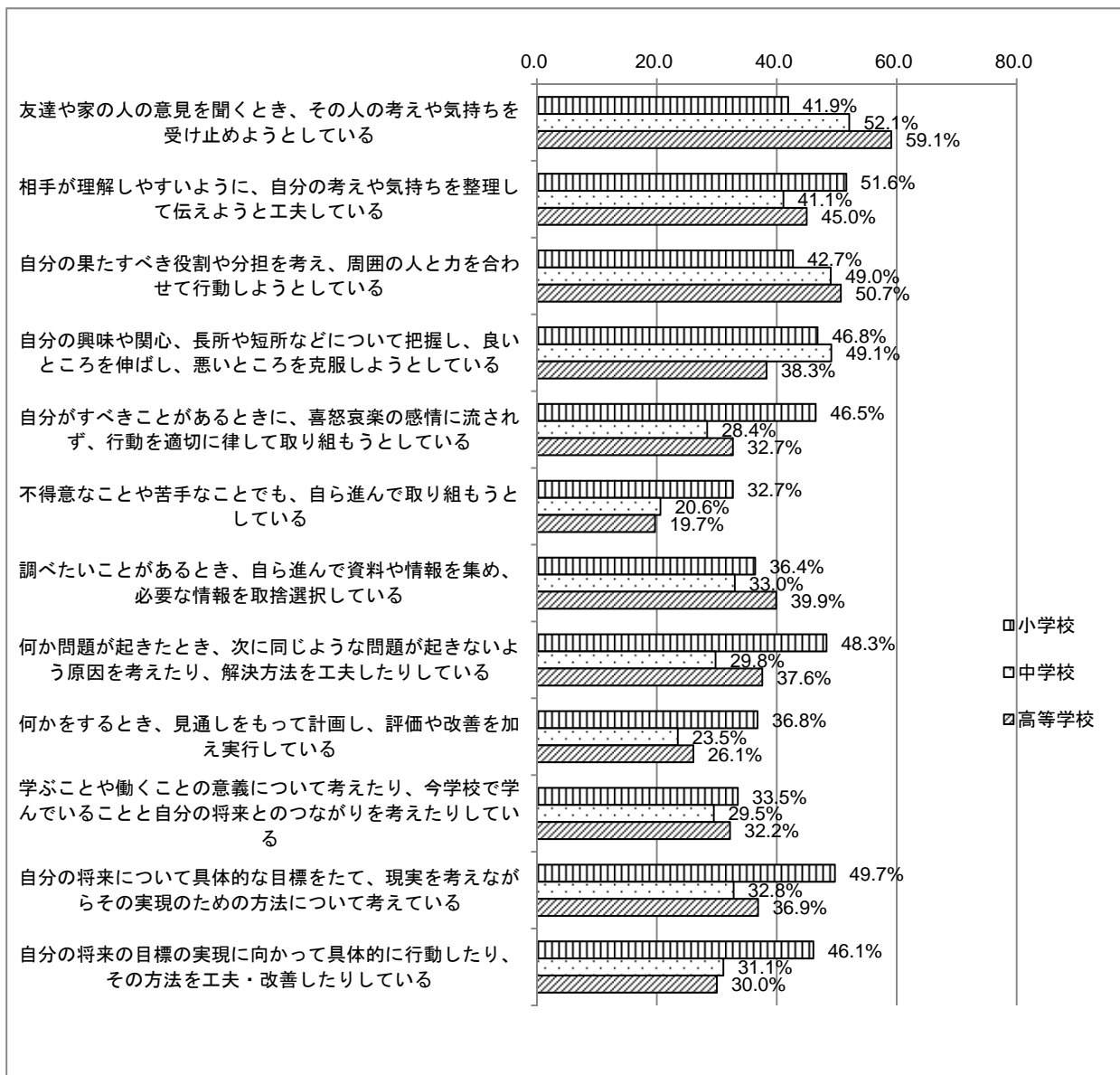


【図2】年間指導計画の内容



児童生徒に対する設問「自分の日常生活の様子を振り返ったとき、あてはまるものを選んでください」\*4への回答の傾向には幾つの特徴が見られる。最も特徴的なものは、「いつもそうしている」と回答した割合が小学校で高い一方で、中学校になって割合が急落する項目（「不得意なことや苦手なことでも、自ら進んで取り組もうとしている」、「何かをするとき、見通しをもって計画し、評価や改善を加え実行している」、「自分の将来について具体的な目標をたてて、現実を考えながらその実現のための方法を考えている」、「自分の将来の目標の実現に向かって具体的に行動したり、その方法を工夫、改善したりしている」）が見られる点である（図3）。中学校に入って人間関係も広がり、社会の一員としての役割や責任の自覚が芽生え始め、様々な葛藤や経験をしながら、現実的に進路の選択や決定を迫られる時期である。小学校の時に比べれば、自己認識のゆれも経験することだろう。

【図3】児童生徒の基礎的・汎用的能力に関する自己認識



だからこそ、ふだんの関わり合いや日常的な教育活動そのものを通じて、キャリア発達をきめ細かく促すよう心がけたい。例えば「調べたいことがあるとき、自ら進んで資料や情報を集め、必要な情報を取捨選択している」、「何か問題が起きたとき、次に同じような問題が起きないように原因を考えたり、解決方法を工夫したりしている」、「何かをするとき、見通しをもって計画し、評価や改善を加え実行している」といった質問項目は「課題対応能力」に対応しているが、この「課題対応能力」は、日常の教育活動を通して向上させることができる力である。

児童生徒個々のキャリア発達を促す観点から、どの学校種においても、日常の教育活動の実践をキャリア教育の視点から見直し、再整理し、取組を充実させることが重要といえるだろう。



## (2) 今後の方向性

中学校・高等学校の生徒調査において、「将来の生き方や進路を考える上で役に立った指導内容」\*5で「役に立った」という回答が高かったのが、「様々な教科における日々の授業」（中学校：56.9%（1位）、高等学校：41.4%（2位））、「部活動などの課外活動」（中学校：54.5%（2位）、高等学校：50.8%（1位））、「係活動・委員会活動や生徒会活動などの日々の活動」（中学校：40.9%（7位））であることから、教科・領域を横断した教育課程全体を通してのキャリア教育の充実の必要性がみえてくる。

中央教育審議会答申「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について」（平成23年1月）では、キャリア教育の教育課程への位置付けについて、以下のように述べられている。

ここで留意すべきは、キャリア教育はそれぞれの学校段階で行っている教科・科目等の教育活動全体を通じて取り組むものであり、単に特定の活動のみを実施すればよいということや、新たな活動を単に追加すればよいということではないということである。（中略）各教科・科目等における取組は、単独の活動だけでは効果的な教育活動にはならず、取組の一つ一つについて、その内容を振り返り、相互の関係を把握したり、それを適切に結び付けたりしながら、より深い理解へと導くような取組も併せて必要である。さらに、各教科・科目等における取組だけでは不足する内容を把握し、その内容を付け加えていく取組も必要である。

（「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について」32ページ）

学校での教育活動全体でキャリア教育を推進するために、まず、各校の目指す児童生徒の姿、身に付けさせたい力を明確にし、既存の教育活動をキャリア教育の視点で振り返り、改善を図り、それらをつないでいく作業が必要である。この実現のためには、年間指導計画の作成が極めて重要であることを確認したい。

### 参考：第一次報告書における参照データ

*1	P55、57 小学校・学校調査 問3(1)(2)、 P115、117 中学校・学校調査 問3(1)(2) P220、222 高等学校・学校調査 問4(1)(2)
*2	P58 小学校・学校調査 問3(2)②、 P118 中学校・学校調査 問3(2)②、 P221 高等学校・学校調査 問4(1)②
*3	P60 小学校・学校調査 問3(4)、 P120 中学校・学校調査 問3(4)、 P225 高等学校・学校調査 問4(4)
*4	P94 小学校・児童調査 問5、 P169 中学校・生徒調査 問9、 P285 高等学校・生徒調査 問11
*5	P173 中学校・生徒調査 問12、 P289 高等学校・生徒調査 問14

## テーマ5 教員研修

キャリア教育に関する研修の実施率は4～6割に留まっている  
まずは、“宝”の詰まった資料（指導資料（パンフレット）、手引き等）を活用し、  
キャリア教育の研修を充実させましょう。

- 小学校・中学校・高等学校の学校種を問わずキャリア教育に関する研修はあまり実施されていない。キャリア教育の評価に関する研修も同様である。
- 小学校では、「学校外におけるキャリア教育に関する研修会等」への参加が他の学校種の場合よりも少ない。
- 学校外で実施される研修会への参加状況をみると、小学校と中学校間の交流は盛んである。
- 今後、キャリア教育に関する資料や情報を上手に活用し、研修会を充実させ、キャリア教育の評価に対する理解を深める必要がある。

### （1）キャリア教育に関する校内研修の状況

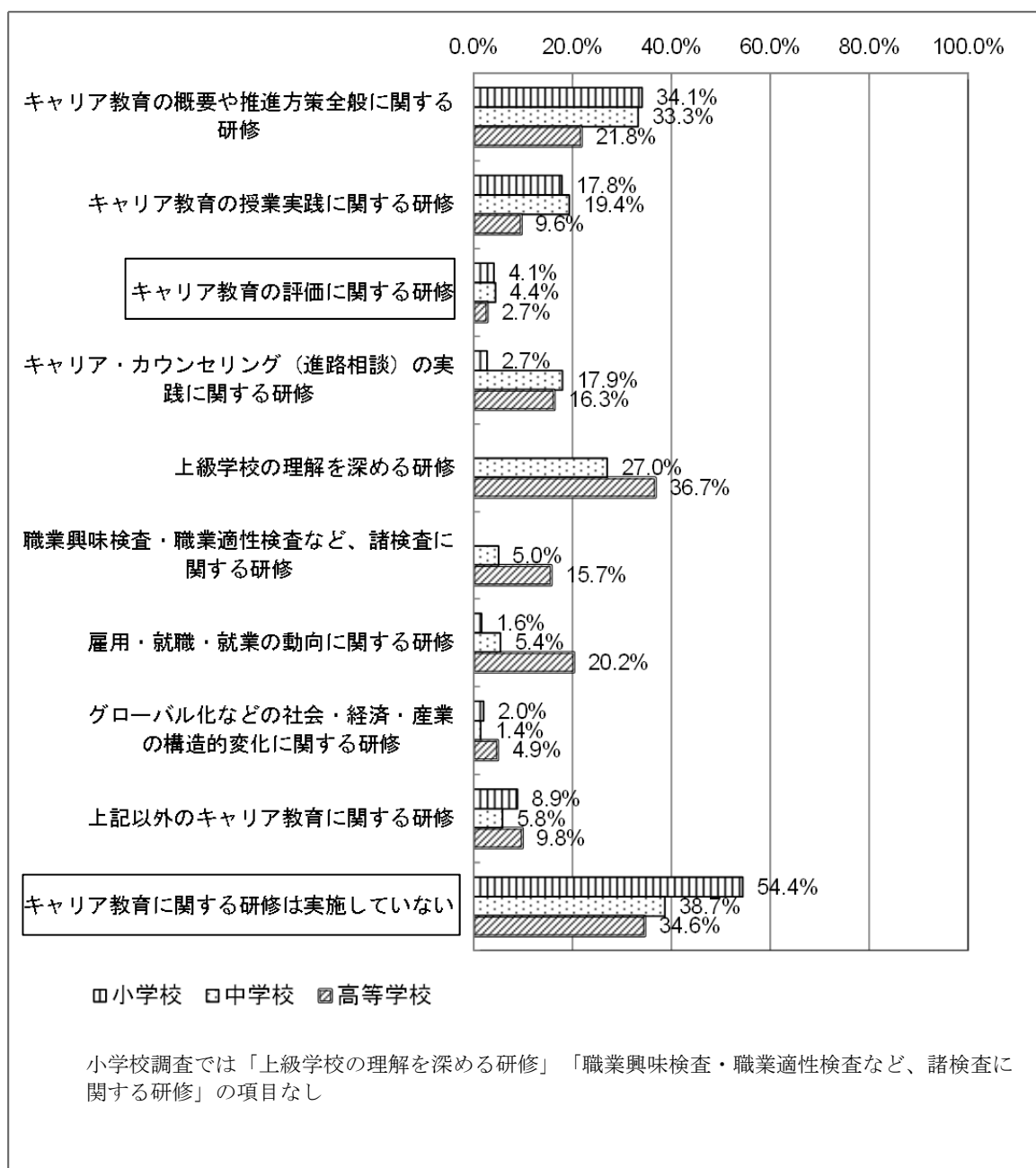
「今年度、貴校で実施した（実施予定も含む）研修会の内容について、あてはまるものを全て選んでください」\*<sup>1</sup>という問いに対して、最も高い割合であった項目は、小学校と中学校で「キャリア教育の概要や推進方策全般に関する研修」（34.1%、33.3%）、高等学校で「上級学校の理解を深める研修」（36.7%）であった（図1）。

なお、「キャリア教育の評価に関する研修」と答えた学校の割合は、小学校で4.1%、中学校では4.4%、高等学校では2.7%と、いずれの学校種においても極めて低い状況である。評価に関する研修は学校種を問わず広まっていないことを表している。

また、同じ設問で「キャリア教育に関する研修は実施していない」の回答率が小学校54.4%、中学校38.7%、高等学校34.6%と高い。これに関連して、「今年度実施した研修会で活用した資料・情報」\*<sup>2</sup>に関する質問への答えにおいても、多くの資料・情報があまり活用されていない実態（図2）がうかがえる。さらに、「キャリア教育に関する研修は実施していない（又はその予定はない）」との回答が、小学校47.7%、中学校37.3%、高等学校36.6%と高い割合を示しており、キャリア教育に関する校内研修そのものが普及していない実態がかいま見える。

ここで、「今年度参加した（参加予定がある）校内研修会」\*<sup>3</sup>に関する担任の回答を見ると、「（上記の）いずれにも参加したことはない」と答えた担任の割合が、小学校65.2%、中学校47.1%、高等学校47.9%とどの学校種でも高く、学校調査の結果を裏付けている。また、「キャリア教育の評価に関する研修」への参加状況についても、小学校3.1%、中学校3.8%、高等学校2.1%とどの学校種でも低く、こちらも学校調査に沿った結果が得られ

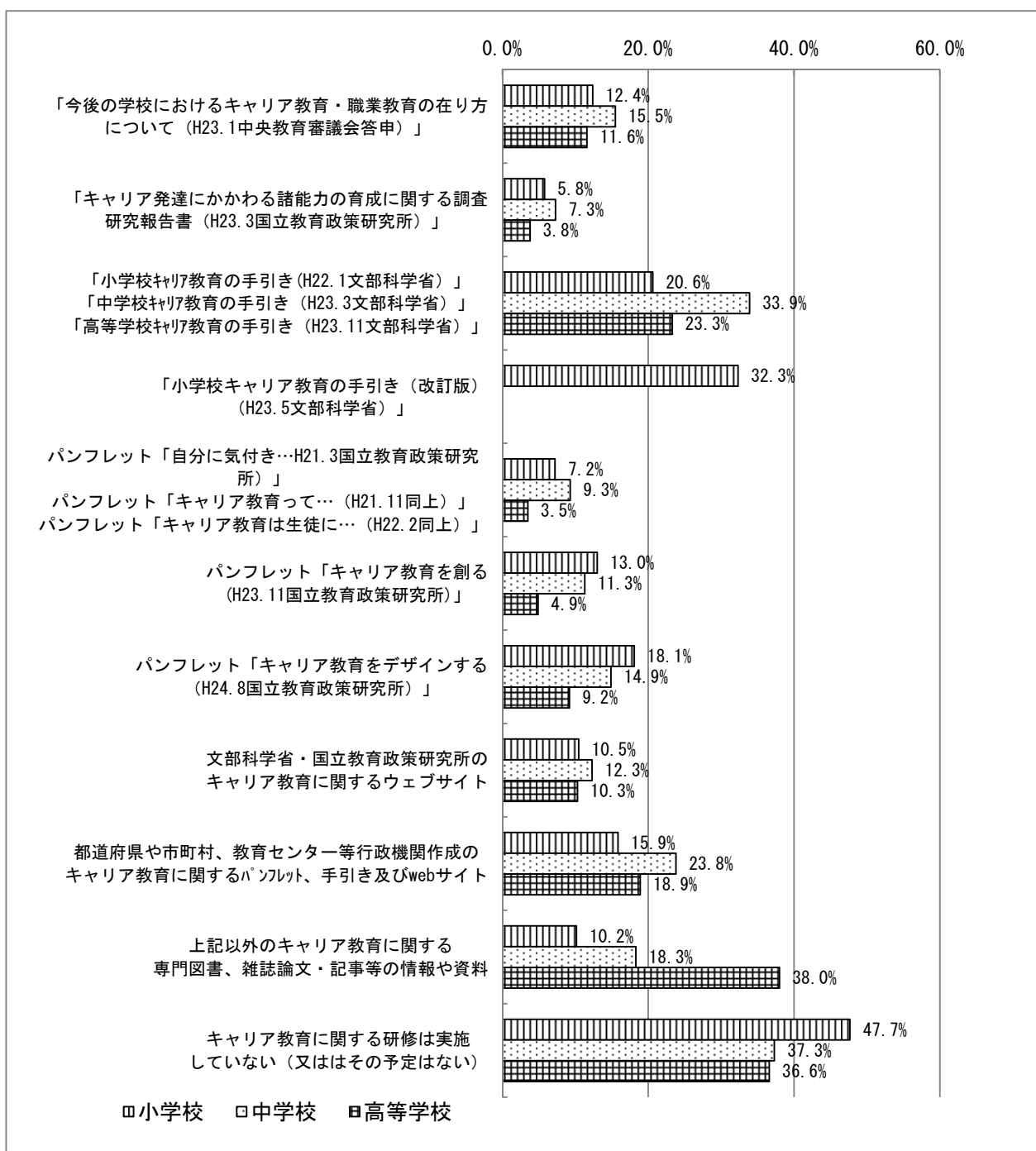
【図1】今年度実施した（実施予定も含む）研修会の内容



ている。

キャリア教育の研修は概要理解や推進方策に関するものがいまだ主であり、評価に関する内容を含んでおらず、その研修自体も実施していないことが多いので、今後、機会や内容の充実を図っていく必要がある。

【図2】今年度実施した研修会で活用した資料・情報



## (2) 学校外の研修会への参加状況

それでは、学校外も含めた場合の研修の機会はどうであろうか。そして、評価に関する研修機会はどのような状況にあるのだろうか。

「今年度の研修会などへの教職員の派遣状況」\*<sup>4</sup>についての学校の回答をみると、小学校は「中学校の公開授業（キャリア教育の授業にかかわらず）」が56.7%、中学校は「小学校の公開授業（キャリア教育の授業にかかわらず）」が62.4%とともに最も高い。互いに交流している実態がうかがえる。「教育相談、キャリア・カウンセリング（進路相談）に関する研修」の回答割合をみると、小学校38.4%、中学校43.1%、高等学校57.3%と高

い。一方「学校外におけるキャリア教育に関する研修会等には派遣していない」の回答が小学校 18.7%、中学校 9.3%、高等学校 5.8%となっており、小学校における派遣状況が他校種に比べ低い。学校調査における研修の状況をみると、多様な資料や情報が活用されていないことに合わせて、研修会自体がまだ進められていない。特に小学校でその傾向が強い。

では担任はどのような状況に置かれているだろうか。「学校外における研修等への参加状況(平成 20 年度から 5 年間)」\*<sup>5</sup>の問いに対して、小学校の担任では「中学校の公開授業(キャリア教育に関する授業にかかわらず)」が 41.3%、中学校の担任では「小学校の公開授業(キャリア教育に関する授業にかかわらず)」が 50.0%で一番高く、学校調査の結果と同様に小・中学校においては互いに交流している実態が表れている。これに対して、高等学校は「教育相談、キャリア・カウンセリングに関する研修会」の 26.1%が一番高い。次いで小学校・中学校や大学・短期大学、専門学校・専修学校・各種学校の公開授業が挙げられている。これは、高等学校においては社会への出口間近だからこそ教育相談、キャリア・カウンセリングの必要性を担任が強く意識しているためと考えられる。

ただし、過去 5 年間学校外における「研修会には参加していない」と答えた担任は、小学校で 30.2%、中学校で 19.6%、高等学校で 30.4%と高い割合で存在している。

学校内において研修機会が少なく、担任も参加していないという課題を述べたが、学校外での研修参加の機会は多くはないという問題が見受けられる。

### (3) 今後の方向性

まずは、校内研修においてキャリア教育を取り上げること、学校外におけるキャリア教育の研修会への参加を推進して、キャリア教育への理解を深めることが全ての基盤となることを確認したい。「何のためのキャリア教育なのか、そのためにはどんなことが必要なのか、計画・実践・評価・改善の道筋はできているか」など、研修を通し一人一人の教員がしっかりと認識し、確固たる信念の下キャリア教育を推進していくことが重要となろう。その際、教育委員会や各学校のキャリア教育担当者は、今まで出されている多くの資料、情報を率先して活用し、研修を充実させるべきである。

キャリア教育で育てる力を明確にして、実践、評価することで、小学校・中学校・高等学校の学びをつなぎ、子供たちのよりよい成長を保障することが、キャリア教育の新たな方向を示すことになる。

#### 参考：第一次報告書における参照データ

- |   |
|---|
| *1 P62 小学校・学校調査 問 5、P123 中学校・学校調査 問 6、P229 高等学校・学校調査 問 7          |
| *2 P63 小学校・学校調査 問 6、P124 中学校・学校調査 問 7、P230 高等学校・学校調査 問 8          |
| *3 P80 小学校・担任調査 問 1(3)、P145 中学校・担任調査 問 1(3)、P252 高等学校・担任調査 問 2(3) |
| *4 P64 小学校・学校調査 問 7、P125 中学校・学校調査 問 8、P231 高等学校・学校調査 問 9          |
| *5 P81 小学校・担任調査 問 1(4)、P146 中学校・担任調査 問 1(4)、P253 高等学校・担任調査 問 2(4) |

## (2) キャリア教育の充実と学習意欲の向上の関連

分析編の最後に強調したいのは、小学校、中学校、高等学校のいずれにおいても、キャリア教育の充実は児童生徒のキャリア教育に関する学習への積極性を促し、学習意欲の向上にもつながっていると考えられる点である。

ここでいうキャリア教育の各実践とは、具体的には

- ① 全体計画に基づく学級等のキャリア計画の立案
- ② 発達課題に即した学級等のキャリア計画の立案
- ③ 計画に基づくキャリア教育の実施
- ④ キャリア教育実施のための時間の確保
- ⑤ 人生上の諸リスクに関する情報収集（小学校を除く）
- ⑥ 体験学習／職場体験／インターンシップ、体験学習等の事前・事後指導

を指す。

これらを行っているかは、各学校段階で比較的似た傾向にある。つまり、ある実践を行っている、他の実践も行っている傾向にある。そして、これらの実践を行っている、児童生徒のキャリア教育に関する学習への積極性や学習意欲の向上が見られる傾向にある。

すなわち、全校的なキャリア教育の計画と児童生徒の発達課題に即して各学級やホームルーム、学年における計画を定め、時間を確保し、計画に基づいて実践すれば、キャリア教育の学習に対する積極性や学習意欲の向上といった成果に結びつきうるということだ。

すでに、重点目標を絞り、具体的目標を明確にした全体計画の下で実践することの重要性や、学校や学級におけるキャリア教育の推進と充実の大切さ、自校や自校の生徒の現状をベースにした計画に沿った取組が学習意欲の向上につながることなどを伝えてきた。ここで伝えたいことは、それらの結果にも沿っている。つまり、目指すべき目標（＝全体計画に定められた重点目標や具体的目標）とスタート地点（＝児童生徒の現状）を理解し、それらを踏まえながら進むべき方向へ進む（＝計画に基づく実践とそのための時間の確保）ことが望ましいということにほかならない。地道な、そして堅実な取組こそが児童生徒にとって良い結果をもたらす、ということなのかもしれない。

いずれの学校段階においても、キャリア教育の充実は学習意欲の向上につながっていく。本節で全てのキャリア教育実践がもつ影響について紹介できたわけではないが、少なくとも上に提示した項目のいずれも、学習意欲の向上に関わりがあると見られる。各校の現状にも鑑みながら、取組を充実させていくことが望まれる。

※以上は各学校段階の担任教諭の認識を多重対応分析によって分析した結果に基づいている。

分析の詳細については、附表欄(P145～148)に掲載している。